

- ・氏名：李 龍（り りゅう）
- ・発表題目：『易緯乾鑿度』に見られる八卦卦氣説の一考察
- ・要旨（800字以内）：

・卦氣説とは、易の卦爻を月・節気・一年の日数などと結びつける漢代象数易の理論の一種である。卦氣説は複数の体系が存在するが、その根幹の一つを成すのが、坎・震・離・兌の四正卦構造である。

四正卦構造は、『周易』説卦伝に遡ることができる。説卦伝の「帝 震より出づ」の章は、八卦一方位一時節の対応関係を通じて、一年にわたる生物の成長・収穫を描き出している。しかし、そのうち方位については明文の欠落があり、時節を明確に示しているのは「正秋」のみである。

「帝 震より出づ」の章をより精密に敷衍したのは、前漢後半以降に成立したと考えられる『易緯乾鑿度』である。ここでいう「精密」とは、八方が完備されているのみならず、八卦に対応する時節が月および日数にまで規定されることを意味する。

まず、八卦と十二月の配当についてみると、両者間の数理的齟齬を調整するため、十二月のうち八月を選出して八卦に配当し、残る四月を「漸」という形式によって理論の中に位置づける。これについて、先行研究は「漸」を「包括」などと釈義するにとどまり、「なぜ「漸」が可能となるか」という論理の説明は十分になされていない。

次に、八卦の各卦に当てられる日数は、一歳を三百六十日とする前提のもと、四十五日と定める。しかし、一卦が四十五日を司るとすれば、それをいかに一月（約三十日）の範囲内に収め得るかが問題となる。この点については、卦月配当と卦日配当の間には「明らかに異なる」と指摘されている。しかし、『乾鑿度』の原文には因果関係を表わす「故」が存在し、両者間に一定の関連が想定されうる。

以上、『易緯乾鑿度』に見られる八卦卦氣説は、説卦伝に比べてより精密な構造を備えている一方で、卦月配当における「漸」の論理、ならびに卦月配当と卦日配当の間の関連については、なお未解明の課題が残されている。本報告は、これらの問題点を中心に考察することを目的とする。

以上